

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20530589

研究課題名（和文） 現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究

研究課題名（英文） Friendship, Self-Concept and social adjustment on contemporary adolescents

研究代表者

岡田 努 (OKADA TSUTOMU)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：10233339

研究分野：青年心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：現代青年、傷つきやすさ、自己愛、ふれ合い恐怖、ランチメイト症候群、友人関係

1. 研究計画の概要

青年の友人関係および自己の特徴が、ふれ合い恐怖および自己愛傾向に及ぼす影響過程を、以下に示すモデルによって実証的に検証する。すなわち「友人から心理的に傷つけられる恐れ」は、「友人との内面的関係を取ることを拒否」と「過剰に円滑な関係を指向する」ことを促進する。これまでの研究成果から、内面的関係を拒否する度合いが高い者ほど、ふれ合い恐怖傾向が高く、過剰に円滑な関係を指向する者は自己愛傾向が高いと考えられる。またこうした傾向は青年期後期において顕著に見られるだろう。一方、内面的関係の拒否は、これまでの研究から、自己の発達を抑制すると考えられる。こうしたモデルについて必要な尺度を作成し実証的な検証を行う。

2. 研究の進捗状況

(1)友人関係において傷つけ合うことを避ける傾向について尺度を作成するため、まず第1次予備調査として、自由記述による項目収集を行った。この結果は日本パーソナリティ心理学会第17回大会において発表された。

(2)次にこれらに基づき項目を作成し第2次予備調査を実施し、「傷つけられ回避」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」の各下位尺度を得た。また信頼性と妥当性を確認した。この結果は日本教育心理学会第51回総会において発表された。

(3)さらにこの尺度に基づいて第1次本調査を以下のように実施した。

調査対象 首都圏、近畿圏、北陸の4年制

大学生1～4年生 有効回答数464名(男子212名,女子252名 18～25歳 うち22歳までが99.6%)

調査内容 ①友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度。第2次予備調査で作成された尺度。本研究ではこのうち「礼儀」を除く3つの下位尺度を用いた。

②ふれ合い恐怖尺度 岡田(2002)において作成された尺度で、「対人退却」「関係調整不全」の2つの下位尺度から成る。

③自己愛についての尺度：中山・中谷(2006)の評価過敏性-誇大性自己愛尺度を用いた。「誇大性」「評価過敏性」の2つの下位尺度からなる。

④ランチメイト症候群尺度 佐藤・畑山(2002)の作成した尺度に加えて、今回新たに作成した項目を加えたもの。

⑤自己意識尺度 菅原(1984)が作成した自己意識尺。「公的自己意識」「私的自己意識」の2下位尺度から成る

⑥自尊感情尺度 Rosenberg(1965)が作成し、山本・松井・山成(1982)が邦訳した尺度。いずれも授業時間を利用し、調査の趣旨について納得が得られた場合のみ回答を願った。なお調査はすべて連結不可能な無記名調査である。

本調査の結果の一部は日本教育心理学会第53回総会で発表される予定である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している
(理由)

当初の計画とおり、平成21年度までに友人関係に関する尺度について、自由記述段階

からデータ収集を行い、テキストマイニングの技術を用いた分析を行うことができた。またそのようにして得られた項目をもとに尺度を作成し、信頼性、妥当性を確認することができた。またこれらの結果について、関連学会で成果を発表することができた。さらに、この結果に基づいて平成22年度においては、慎重な項目選択を行い、大学生を対象として比較的大規模なデータによりデータ収集を行うことができた。またその結果についても、平成23年度中の学会で発表を行うことになった。

4. 今後の研究の推進方策

(1)第1次本調査の充実：第1次本調査のデータについてさらに追加の収集を行い有効回答数を500名まで揃えることを検討する。

(2)第1次本調査結果の分析：調査項目が多岐にわたるため、詳細な分析を行う。とくにランチメイト症候群と「ふれ合い恐怖的心性」の異同を明確にするとともに、友人関係パターンおよび自己愛の水準との関係について検討を行い、論文化する。

(3)第2次本調査として中学、高校などより低年齢の調査対象者に広げ、社会適応についての発達的な相違を明らかにする。

(4)調査対象者のうち了解が得られた場合について縦断的研究を行う。これによって、横断研究では得られない発達的な変容過程を知ることができる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

①岡田努 現代青年の傷つけ合うことを回避する傾向についての研究 日本教育心理学会第51回総会 2009.9.20 静岡大学(静岡県)

②岡田努 現代青年の友人関係に関する試論:傷つけ合うことを避ける傾向について 日本パーソナリティ心理学会第17回大会 2008.11.16 お茶の水女子大学(東京都)